

留学生の対人関係に関する認識とスキルの変容過程

Changes in Cognition and Skills regarding Interpersonal Relationships in International Students

古本裕美（広島大学大学院生）

FURUMOTO Yumi (Graduate School, Hiroshima University)

要 旨

本稿では、ソーシャルスキルトレーニングを行いながら、留学生自身が対人関係に関する調査を行うことにより、彼らの対人関係に関する認識とそのスキルが、どのように変容するかについて検討した。その結果、対人関係の困難に関する原因帰属は変容したが、スキルは向上しなかったことが明らかになり、その原因として、トレーニング不足と、授業内の活動が彼らの時間的・精神的な負担になっていたことが考えられた。

International students explored their interpersonal relationships while participating in a social skills training program during a classroom practical. Changes in cognition regarding interpersonal relationships and changes in interpersonal skills of these students resulting from the practical were investigated. Results indicated that cognition regarding the causes of interpersonal difficulties changed; however, the students' social skills did not improve. It was concluded that this was due to inadequate training and because the students were under a high mental load and time pressure during the classroom activities.

【キーワード】 対人関係, 認識, ソーシャルスキル, 変容

1. 問題と目的

高等専門学校日本語課外補講において、ソーシャルスキルトレーニングと、留学生による、日本人（学生・教員）と留学生（現役・先輩）を対象とした対人行動や対人関係に関する質問紙調査を行った。本稿では、この授業実践を通して高専留学生の対人関係に関する認識とスキルが変容する過程を検討する。

1-1 高等専門学校における留学生

全国に55校ある独立行政法人国立高等専門学校（以下、高専とする）には、文部科学省による国費留学生とマレーシアを代表とした外国政府派遣による留学生とが在籍している。昨年発表された日本学生支援機構の調査によると、その総数は460名であり、これは日本における留学生総数の約0.4%に相当する。広島商船高専では、毎年1、2名の留学生を本科3年時に編入学生として受け入れており、彼らは日本人学生約40名のクラスメイトとなる。なお、本稿で対象とする日本語課外補講は、3、4年次の留学生のみを対象として週に一度（120分）行われているものであった。

1-2 留学生に不足しているソーシャルスキル

高専における留学生の生活は大学よりも高校のものに近く、日本人とともに寮生活を送るため、学習面でも生活面でも日本語のコミュニケーション能力が強く求められるといわれている（大澤・小野・増谷・橋爪・渡部, 2005）。編入から3年後には高専を卒業し、そのほとんどが、日本国内の大学3年次に再び編入していく。このような状況下では、既に

できあがっているコミュニティの中に、留学生自身が入り込み、適応していくスキルがある程度必要であるといえるであろう。しかしながら、日本語課外補講に参加している留学生本人や教職員による話、学校への出欠状況、成績の推移等から、彼らは周りの日本人学生と上手に付き合えておらず、学校の中で孤立しているのではないかと筆者は考えるようになった。特に、周りの人への援助要請が上手く出来ない、お礼が言えないといった行動が観察されたことから、彼らは、対人関係を円滑に運ぶための知識と具体的な技術やコツである「ソーシャルスキル⁽¹⁾ (social skills)」が不足していることが考えられた。このソーシャルスキルの不足は、シャイネス、孤独感、うつ病との関連が高く、対人不適応の原因や結果になる可能性もある(相川, 2000)ため、留学生のソーシャルスキルを向上させることが必要であると考えた。

1-3 留学生の対人関係に関する認識

ソーシャルスキルが不足していることに加えて、留学生には「日本人とうまく付き合えないのは、留学生の日本語が下手だからだ」という認識や「日本人は留学生に興味がない」という認識があった。しかし、彼らをサポートしている事務職員との関係は良好であったことや、実際に、留学生の日本語レベルは中級以上であったことなどから、彼らが日本人とうまく付き合えない原因は、留学生の日本語力だけにあるのではないと推測された。目標言語を使用する際に快適さ(comfort)を感じるには、自分の語学力を肯定的に評価していることと、全体的な自己を肯定的に受け入れていることが重要である(田所, 2002)ことから、前述した高専留学生の対人関係に関する認識は、彼らの異文化適応を妨害する要因の一つとなっている可能性がある。

1-4 本授業実践の目的

これらのことから、本授業実践では、高専留学生3名の対人関係に関する認識や知識が適切なものへと変容することと、彼らに特に不足している「記号化(個人が相手に自らの意思を伝えるスキル)」と「主張性(相手の意思を尊重しながらも、自分の意思を抑えることなく相手に伝えるスキル)」に関するソーシャルスキルが獲得されることを目的とした。これらを達成するために、ソーシャルスキルトレーニング(Social Skills Training, 以下、SSTとする)を行いながら、留学生自身が対人行動や対人関係に関する質問紙調査を行うという活動を採用した。これは、調査の過程で、日本人学生や教員への依頼が必要になることから、この活動がSSTの定着化を図るための課題として設定できると考えたためである。また、質問紙調査の結果を留学生本人が分析することを通して、彼らは日本人の考えを直接知ることができる。これにより、留学生の対人関係に関する認識や知識が変容する可能性が生じると判断したためである。このような活動を通して、最終的には留学生が日本人と上手に付き合えるようになることを目指した。

2. 実践の概要

対象者 広島商船高専に在籍する留学生3名であった。彼らの日本語学習歴は1.5年から3.5年であり、日本語のレベルは中級から上級程度であった。

実施期間 2007年9月から2008年2月まで、120分の授業を計19回行った。

活動と分析の流れ 実践前に、留学生のコミュニケーションスキルを測定した(診断的評価)。授業は、(a) SST1, (b) オリエンテーション, (c) 質問紙調査における質問項

目の選定, (d) 質問紙作成, (e) SST2, (f) 調査実施, (g) データの集計と分析, (h) 結果報告書の作成, (i) SST3, という順に行った。その後, コミュニケーションスキルとソーシャルスキルを測定し(総括的評価), 最後に学期のまとめを行った。授業における活動の流れを図1に示す。



図1 活動の流れ

- (1) 診断的評価：留学生に不足しているスキルを把握するために、コーチ・トゥエンティワンの「コミュニケーションスキルチェック」を用いて、コミュニケーションスキルを測定した。
- (2) 質問紙調査：留学生の対人関係に関する認識が変容することと、彼らの自尊感情 (self-esteem) や自己効力感 (self-efficacy) が向上することをねらいとし、事前にいくつかの質問項目を筆者が収集した。その中から、「外国人に道を教える時の日本語表現」、「友達の作り方」、「外国人の行動」について尋ねる3つの項目を留学生が選定した。「対人関係の困難に関する原因認知」を尋ねる項目は筆者が選定した。
 - i) 外国人に道を教える時の日本語表現
ある港で、外国人に広島商船高専の位置を尋ねられた場合、どのように対応し、どのように答えるかについて質問し、自由に記述させた。
 - ii) 友達の作り方に関する質問項目
田中・高井・神山・藤原 (1993) で挙げられている、留学生が出会いやすい典型的な困難場面の中から、友達作りの場面が選定された。「ある留学生は、日本でなかなか友達できません。実際にどうすれば、日本人の友達を作れるでしょうか。何をきっかけに、どのようなことをし、どのような段階を踏んだらいいのか、何に気がつけたら友人関係がうまくいくのかなどについてアドバイスしてください」という教示を与え、自由に記述させた。
 - iii) 外国人の行動に関する質問項目
大橋・近藤・秦・堀江・横田 (1992) から、日本人が留学生と接して困っている場面が選定された。この場面からうかがえることを選択させた後、自分が日本人の立場なら外国人のことをどのように思うか、反対に、外国人なら日本人のことをどのように思うか、についてそれぞれ自由に記述させた。
 - iv) 対人関係困難の原因認知に関する質問項目
留学生と日本人の対人関係の困難に関する原因認知を尋ねる質問項目として、田中 (2003) の14項目を使用した。日本人には、「あなたからみて、自分が留

学生とうまくつきあいにくい原因があるとしたら、それは何ですか。次のことが、その理由としてどのくらい当てはまると思うかを教えてください。以下の番号から1つ選び、()の中にそれぞれ書き入れてください」という教示を与え、それぞれの項目について4件法で回答させた。留学生には、日本人とつきあいにくい原因について、同様に回答させた。

上記 i から iv の質問項目を含めた質問紙を冊子形式で作成した。日本人を対象とした調査は、各留学生が所属している学科のクラスメイトと教員を対象とした。まず、3名の留学生には、クラス担任に調査の概要を説明し、調査への協力を依頼するよう指示した。実施が認められた後に、質問紙を配布し、調査を行った。同時に、各自のクラス担任とその他3名ずつの日本人教員にも調査への協力を依頼するよう指示した。留学生を対象とした調査は、当時、広島商船高専に在籍していた留学生5名と卒業生3名の計8名を対象とした。卒業生には質問紙を郵送し、回答を求めた。

- (3) S S T : S S Tの方法は佐藤・金山(2006)を参考にした⁽²⁾。S S Tの第1回では相談、謝罪、許可を求める場面を、第2回では依頼場面を、第3回では断りの場面を扱った。
- (4) 総括的評価：不足していたスキルがどの程度獲得されたかを確認するために、「診断的評価」と同じものを用いてコミュニケーションスキルを測定した。これに加えて、相川・藤田(2005)の評定尺度を用いてソーシャルスキルを測定した。
- (5) 形成的評価：留学生が、日本人(学生・教員)と留学生自身のデータをそれぞれ分析した時と、まとめの時に、「あなたが気をつけなければならないこと、変わらなければならないことは何ですか」という質問と、「自由に感想を書いてください」という教示を与え、それぞれ記述させた。これに加えて、各作業に対する取り組み方や自分自身の変化を毎回記述するよう求めた。形成的評価として、これらを実践中と実践後に分析した。

3. 結果と考察

3-1 対人関係形成の困難に関する原因認知の評定結果

質問紙の有効回収数は、留学生8、日本人学生101、日本人教員13であった。

4つの質問項目の中から、対人関係の困難に関する原因認知の平均評定値を表1に示す。留学生と日本人学生における各平均評定値についてt検定を行った結果、二者間で有意差が認められた項目は「留学生の語学力不足」と「留学生の多忙さ」の2つであった。留学生の語学力不足に関しては、留学生の方が日本人学生よりも高く評定しており、留学生の多忙さについては、日本人学生の方が留学生よりも高く評定していることが明らかになった。これらの結果から、日本人学生は留学生が思うほど、留学生の日本語力の低さを原因であると考えていないこと、留学生は自分たち自身が思うよりも日本人学生から多忙であると認識されており、それがうまくつきあえない原因であると考えられていること、の2点が示唆される。留学生のほとんどがクラブ活動に参加していないことや、日本人学生とは別に補講を受けていることなどが、多忙であると認識される一因であると考えられる。

表1 対人関係の困難に関する原因認知の平均評定値

	原因	項目	留学生	日本人	
				学生	教員
1	語学力不足 (留学生)	留学生は日本語があまりうまくないから	2.75 (1.04)	2.02 (.85)	2.00 (.82)
2	語学力不足 (日本人)	日本人は外国語(英語・その他)があまりうまくないから	2.13 (1.13)	2.74 (1.02)	2.08 (.64)
3	スキル欠損 (留学生)	留学生は日本人の考え方や行動の仕方、 ルールがよく分からないから	2.63 (1.19)	2.06 (.85)	2.38 (.51)
4	スキル欠損 (日本人)	日本人は留学生の人達の考え方や行動の仕方、 ルールがよくわからないから	2.88 (.83)	2.38 (.86)	2.62 (.65)
5	社会的知識不足 (留学生)	留学生は日本社会のしくみや慣習をよく知らないから	2.13 (.99)	2.12 (.88)	2.23 (.60)
6	社会的知識不足 (日本人)	日本人は留学生の国の社会のしくみや慣習を よく知らないから	3.00 (1.07)	2.39 (.94)	2.31 (.48)
7	無関心 (留学生)	留学生は日本人にあまり関心がないから	1.63 (.74)	1.81 (.73)	1.23 (.44)
8	無関心 (日本人)	日本人は外国人にあまり関心がないから	2.25 (.89)	1.96 (.84)	1.54 (.66)
9	嫌い・苦手 (留学生)	留学生は日本人が好きでなかったり、苦手だったりするから	1.50 (.76)	1.86 (.76)	1.38 (.51)
10	嫌い・苦手 (日本人)	日本人は外国人が好きでなかったり、苦手だったりするから	1.88 (.83)	2.01 (.89)	2.00 (1.08)
11	多忙 (留学生)	留学生は忙しくてゆっくりつきあう暇がないから	1.38 (.74)	1.94 (.72)	1.54 (.66)
12	多忙 (日本人)	日本人は忙しくてゆっくりつきあう暇がないから	1.75 (.71)	1.85 (.73)	1.92 (.86)
13	魅力なし	相手には、話のあう人や魅力的な人が少ないから	2.13 (1.36)	2.07 (.98)	1.38 (.65)
14	交流下手	相手が誰であっても、自分は人づきあいが苦手だから	2.13 (1.13)	2.34 (1.01)	1.62 (.77)

注1) 尺度は、「1. まったく当てはまらない」から「4. 非常に当てはまる」までの4件法であった。

注2) 括弧内は標準偏差を示す。

田中(2003)の分析方法に従い、対になっている6領域各2項目の原因認知の評定値について、相手側の評定値から自分側の評定値を差し引き、「自他責得点」を算出した(表2参照)。これは、得点が高いほど、相手側の原因を大きく評定していること、すなわち他責傾向を表す。一方、得点が低いほど、自分側の原因を大きく評定していること、すなわち自責傾向を表す。留学生では、語学力のみが負の値となったが、日本人学生では、多忙以外の領域全てが負の値となった。相手側と自分側の評定値間でt検定を行ったところ、有意差が認められたのは次の項目であった。留学生では、社会的知識不足と無関心の2項目で、どちらも日本人側の評定値が高かった。日本人学生では、語学力不足、スキル欠損、社会的知識不足、無関心の5項目であり、いずれも日本人側の評定値が高かった。次に、自他責得点で二者間に有意な差が認められるか否かを検討するためにt検定を行った。

表2 原因認知の自他責得点

原因	留学生	日本人	
		学生	教員
(1) 語学力不足	-.63	-.72	-.08
(2) スキル欠損	.25	-.32	-.23
(3) 社会的知識不足	.88	-.27	-.08
(4) 無関心	.63	-.15	-.31
(5) 嫌い・苦手	.38	-.15	-.62
(6) 多忙	.38	.09	-.38

その結果、社会的知識不足と無関心の2領域で留学生の方が日本人学生よりも得点が高いことが明らかになった。これらの結果から、留学生は自分たちよりも相手の知識不足と関心の無さを指摘し、日本人学生は相手よりも自分たちの語学力不足、スキル欠損、社会的知識不足、関心の無さを指摘していることが示唆される。お互い日本で生活し、普段日本語で話すという環境で過ごしていたとしても、日本人学生は自らの「語学力不足」を指摘しており、これは田中（2003）でみられた大学生の結果と一致する。日本人学生にも、外国語や外国人に対する心理的不安があると推察される。

3-2 留学生の対人関係に関する認識

質問紙を回収し、分析するたびに、「あなたが気をつけなければならないこと、変わらなければならないことは何ですか」という質問を留学生に与えたところ、表3に示した回答が得られた。各回のものを比較したところ、日本人の友達を作り、彼らと上手に付き合うために重要なことは、「留学生の日本語力の向上である」という認識から、「留学生が社会的知識を学習することや積極性である」という認識へと変容したことがわかった。

表3 留学生の内省の変化

分析データ	学習者A	学習者B	学習者C
日本人教員 (12/04 分析)	まだまだ日本の習慣や文化から習わないといけないことがいっぱいある。すみません。	特にないです。	日本人と仲間になるために自分から声をかけること。
日本人学生 (12/18 分析)	クラスメイトの回答を見ると、自分自身が遠慮しすぎていることに気付いた。相手によく話しかけたら、なんとか仲良くできると思う。	これから日本人の考え方やルールについてもっと知るように頑張る。そのために、よく社交的な場所へ行く。そして、日本人から日本の文化を聞く。インターネットで調べる。	日本人には話したい気持ちがいっぱいあることがわかった。自分から話しかけるようにする。
留学生 (01/11 分析)	ただ自分からがんばれば、日本人との関係がうまくいくはず。	団体にいる時、集団行動に協力する。	自分では気づかず太田さんのように日本人が迷惑することがあるかもしれない。
総合的分析 (01/29 分析)	気にせず、みんなといっぱい話してみる。日本の慣習や文化を少しでも理解することが大事。	語学力であると信じていることを考え直す。社会的知識が高くなればいいんじゃないかな。	言語を気にせず、積極的に日本人と話す。日本人に自分の文化や自分に関することを教える。

さらに、どのような過程を経て留学生の認識が変容したかを明らかにするために、実践後、テキストマイニング用のソフトウェア「KH Coder（樋口，2004）」を用いて分析を行った。まず、3名の内省にみられる頻出語を、特徴的な表現として抽出した（表4参照）。

表4 留学生の内省にみられる特徴的な表現（一部）

抽出語	出現数	抽出語	出現数	抽出語	出現数	抽出語	出現数
する	57	思う	32	自分	19	先生	15
ない	55	外国	26	文化	17	ない	15
日本人	32	留学生	21	ある	17	話す	13

抽出語の中から、日本人、思う、外国、留学生、自分、文化、先生の7語が各内省にどのように現れ、どのように変化していくかについて時系列に分析を行ったところ、留学生が各データを分析する過程で、驚き、不安、喜び、共感といった感情や情動も変化しており、それを経て対人関係の困難に関する原因認知が変容したことがわかった。一例として、学習者Aの内省を表5に示す。

表5 学習者Aの内省（自由記述）

日本人教員 (12/04 分析)	E先生の答えにびっくりした。意味が分からない。先生方の答えを読んだら、いくつかの意見に人種差別を感じた。また、外国人はいつも日本人に迷惑をかけているらしい。このことを考えれば、考えるほど、自信がなくなってきた。
日本人学生 (12/18 分析)	クラスメイトの解答を見ると、自分自身が遠慮しすぎることに気付いた。データをまとめたときに、質問がもっと多ければいいのになと思った。（中略）しかし、みんなの答えを読んだら、アンケートのテーマについてもっと知りたくなった。例えば、寮生はどう思うかなと知りたくなった。
留学生 (01/11 分析)	このアンケートについて先生方、学生、留学生の答えをまとめたら、外国人と日本人がお互いの慣習、文化、宗教などが違う点に関心をもたないのが一番の問題だと思った。回答してくれた人の答えを読んだら、自分のやることに自信がだんだんなくなってきた。留学生というより、私が本当の外人に見えるのかな。
総合的分析 (01/29 分析)	日本人はあまり自信がないみたい。先生方はいつも学生のことを心配して、学生に対して責任があると思われるから、他人のせいにはしない。留学生はなぜ他人のせいにするか、私も知りたい。

3-3 留学生のコミュニケーションスキルとソーシャルスキル

実践前に、留学生のコミュニケーションスキルを測定したところ、特に、「要望（例：やってほしいこと、やめてほしいことを伝える）」と「援助要請（例：悩みごとを言う、知らないことを知らないと言う）」の数値がそれぞれ低かった。実践後に再度測定したところ、それぞれの数値は上昇しており、「主張性」に関するスキルが獲得されつつあることが推察された。ただし、年明けからは、留学生が補講に欠席、遅刻、早退する頻度が全体的に増え、連絡をせずに欠席や遅刻をしたり、十分な理由を述べずに早退したりするようになった。彼らと話し合ったところ、この頃から始まった報告書の作成が彼らの時間的・精神的な負担になっていたことがわかった。実践後に測定したソーシャルスキルの結果からは、全体的に「記号化」に関するスキルの数値が低いことが明らかになった。よって、理由が

上手く言えない、嫌な事を上手に断れないという状況は、未だ彼らの「記号化」や「主張性」に関するスキルが不足していることがその一因であると考えられる。質問紙調査から得た対人関係についての知識やルールを留学生が補講外で活用するためにも、報告書の作成から、彼らが好きなソーシャルトレーニングへと授業内容を変更しても良かったかもしれない。

4. まとめと今後の課題

診断的評価、形成的評価、総括的評価を行うことにより、留学生の対人関係に関する認識が変容していく過程を教師側が捉えることができた。留学生の認識が変容した原因には、質問紙調査を通して日本人の意見に直接接触し、それを自分自身で数値化したことが考えられる。特に、毎日同じ教室で過ごすクラスメイトからの回答は、彼らにとって大変影響が大きいものであったといえよう。自分たちの日本語力不足に関する認識がずれていたことに気づけたことは、日本人との接触を妨害している心理的要因が小さくなる可能性が生じるという点で肯定的に評価できる。

しかし、後半の日本語課外補講への出席状況や、実践後に測定した留学生のソーシャルスキル得点からは、本授業実践では、自分の素直な気持ちや考えを表現し、相手にはっきりと伝えるというスキルが十分向上しなかったといえる。実際に、クラス担任やクラスメイトに対して調査の依頼を円滑に行えた者は1名のみであったことから、練習したスキルの定着化を目的とするには、質問紙調査という活動は不適切であった可能性がある。今後は、SSTにおけるリハーサルを十分行ったうえに、定着化のための活動を慎重に選定する必要がある。

日本人学生のデータからは、「郷に入れば郷に従え観」や「外国語・外国人コンプレックス」の存在が観察された。このような状況を改善し、教室が人間関係を楽しめる場へと変わるためには、日本人を含めたソーシャルスキル教育やチームアプローチの実施が有効であると考えられる。善本(2004)の研究において、コミュニケーションを積極的に開始するスキルや自己主張するスキルが不足していると、外国語学習に対する苦手意識を形成してしまうことが明らかになっていることから、日本人学生に対してもソーシャルスキルの教育が必要であるといえる。また、対人関係の量的拡大(多様なニーズを満たす広範な関係性形成)と、質的充実(サポートや関係の良好さ)により、留学生の異文化適応が促進される(田中, 2000)ため、留学生担当教員、学生チューター、スクールカウンセラー、クラス担任、日本語教師らが連携して留学生の学業と生活をサポートし、日本人学生や学外の留学生(外国人)との接触頻度を増やす機会を設けることも今後必要であろう。

謝辞: 本授業実践にご協力くださった広島商船高等専門学校の教務主事、諸先生方、学生課長、課長補佐、そして留学生のクラスメイトに心よりお礼申し上げます。

注

- (1) 相川・藤田(2005)では、ソーシャルスキルは「コミュニケーションスキル」と「対人関係スキル」の2つから構成されている。
- (2) SSTは、(a) インストラクション、(b) 留学生に考えさせ、発表させる、(c) お互

いの共通点, 相違点, 良い点を探す, (d) モデリング, (e) モデルとの共通点, 相違点を探した後, どうしてそれが必要か, どうしてそれが良くないか, どのような気持ちになるかなどを考える, (f) リハーサル, (g) 内省報告, (h) 定着化, の順に行った。

参考文献

- (1) 相川 充 (2000) 「社会的スキルの不足がもたらすもの」『人づきあいの技術－社会的スキルの心理学』第8章, サイエンス社, 201-225.
- (2) 相川 充・藤田正美 (2005) 「成人用ソーシャルスキル自己評定尺度の構成」『東京学芸大学紀要1部門』**56**, 87-93.
- (3) 大澤宣子・小野史眞子・増谷祐美・橋爪阿美・渡部裕子 (2005) 「平成16年度理科系進学者のための日本語中級教材作成経過報告」『独立行政法人日本学生支援機構日本語教育センター紀要』**1**, 133-148.
- (4) 大橋敏子・近藤祐一・秦 喜美恵・堀江 学・横田雅弘 (1992) 『外国人留学生とのコミュニケーション・ハンドブック－トラブルから学ぶ異文化理解－』アルク, 34-37.
- (5) コーチ・トゥエンティワン http://test.jp/guestSurvey/intro/id/free_commuskill
- (6) 佐藤正二・金山元春 (2006) 「中学校におけるソーシャルスキル教育の実践」相川 充・佐藤正二 (編)『実践! ソーシャルスキル教育 中学校－対人関係能力を育てる授業の最前線－』第1章, 図書文化社, 8-21.
- (7) 田所真生子 (2002) 「外国語使用における『快適さ』に対する自己評価とセルフ・エスティームの関係についての考察」『国際開発研究フォーラム』**22**, 113-124.
- (8) 田中共子 (2000) 「在日外国人留学生のソーシャル・サポート・ネットワークの構造」『留学生のソーシャル・ネットワークとソーシャル・スキル』第1章, ナカニシヤ, 35-60.
- (9) 田中共子 (2003) 「日本人学生と留学生の対人関係の困難に関する原因認知の比較」『学生相談研究』**24**, 41-51.
- (10) 田中共子・高井次郎・神山貴弥・藤原武弘 (1993) 「在日留学生に必要なソーシャル・スキル」『広島大学総合科学部紀要IV理系編』**19**, 87-99.
- (11) 樋口耕一 (2004) 「テキスト型データの計量的分析－2つのアプローチの峻別と統合－」『理論と方法』**19**, 101-115.
- (12) 善本 孝 (2004) 「社会的スキルと外国語学習に対する積極性－共分散構造分析による研究－」『フランス語教育』**32**, 101-113.